

2024 年度 自己評価・学校関係者評価報告書

2025 年 2 月 4 日

駒沢女子短期大学付属こまざわ幼稚園

1. 本園の教育目標

- 遊び 遊びのなかで主体性を育てます
- 心 命をいつくしむ心を育てます
- 表現力 伝え合う分かち合う表現力を育てます

2. 本年度重点的に取り組む目標・計画

- ①子ども同士の豊かなかかわりの中で、子どもの主体的な活動を支える教育課程の編み直しを行う。
- ②幼保小連携カリキュラム「ひまわりプログラム」の実践と内容の充実を図る。

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

	評価項目	評価	取り組み状況
I	保育の計画性	A	<ul style="list-style-type: none"> ・2023 年度末に全教員で保育実践を評価し、幼稚園教育要領の趣旨を踏まえ、また園の特色を具現化する新しい教育課程の編み直しを行った。子どもの実態に即し、かつ子どもの主体的な活動を支える意図的・計画的な保育実践を目標に、長期指導計画並びに短期指導計画を作成した。 ・本評価項目に対する保護者の肯定的評価は、全項目平均 95.1%を示した。 (保護者アンケート回答率 85.8%)
II	保育の在り方・ 幼児への対応	A	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員は防犯・防災訓練や安全点検を定期的実施し、安全への配慮には細心の注意を払っている。また小児保健について学んだことが子どもたちへの日々の健康視診に活かされている。 ・小規模園の良さを生かし、すべての子どもたちの育ちを教職員が共有し、個々の課題に対して様々なアプローチを試み、一人ひとりの子どもの育ちを温かく支えることに努めている。 ・本評価項目に対する保護者の肯定的評価は、全項目平均 97.6%を示し高い評価を得ることができた。
III	保育者としての資 質能力	A	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの成長を自分の喜びとして感じ、また子どもと一緒に生活を創り出すことに喜びを感じることができる教職員集団であると言える。 ・本評価項目に対する保護者の肯定的評価は、全項目平均 95.9%を示した。
IV	保護者への対応	B	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の思いや願いに真摯に向き合い、必要に応じて組織的に対応を行い、保護者と共に子どもの成長を喜ぶことに努めている。 ・バス利用の方が多くいるため、日々の子どもの生活の様子についてコドモンアプリを利用して毎日配信しているが、形骸化しないよう工夫を加えていきたい。 ・本評価項目に対する保護者の肯定的評価は、全項目平均 94.1%を示した一方で、取り組みが不十分との指摘もあり、園の教育方針や、教育的配慮が十分に伝わるよう対話をしていきたい。
V	地域とのかかわり	A	<ul style="list-style-type: none"> ・向陽台小学校と向陽台保育園と連携を図り、「ひまわりプログラム」(アプローチ&スタートカリキュラム)を 2022 年度に策定、実践は 2 年目を迎えた。子どもに就学に対する期待感と安心感を与え、保育者と小学校教諭が互いに学び合う取り組みを行うとともに、とりわけ本年度は、保育園との横のつながりを強化した。 ・本評価項目に対する保護者の肯定的評価は、全項目平均 94.9%を示した。

VI	研修	A	<ul style="list-style-type: none"> ・アプローチカリキュラムの修正のため、園長自らの小学校教諭としての経験と知見を活かし、小学校教育を覗んだ保育の在り方についての研修会を行った。また、幼児教育におけるデジタル音楽表現の可能性など、新しい教材や子どもの興味関心に即した教材について、大学の教員の指導を受けた。 ・本評価項目に対する保護者の肯定的評価は、全項目平均 96.9%を示し、保護者からも高い評価を得た。
----	----	---	---

(評価 A:十分達成されている B:達成されている C:取り組まれているが成果が十分でない D:取り組みが不十分である)

4. 総合的な評価結果

評価	理由
A	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度の重点的目標である「子ども同士の豊かなかかわりの中で、子どもの主体的な活動を支える教育課程」の策定については、全教職員で1年間の保育を評価し、教育課程の編み直しを行った。今後も年度ごとにカリキュラムマネジメントを行い、子どもの実態に即した教育課程になるよう修正を行っていく。 ・同じく本年度の重点的目標である幼保小連携カリキュラム「ひまわりプログラム」の実践と内容の充実に関しては、2024年度は向陽台保育園との横のつながりを強化した。 ・上記の実績に加え、自己評価結果及び保護者評価結果、学校関係者評価委員会の意見を精査し、今年度の総合的な評価として、十分に達成されているものとする。

(評価 A:十分達成されている B:達成されている C:取り組まれているが成果が十分でない D:取り組みが不十分である)

5. 今後取り組む課題

	課題	具体的な取り組み方法
1	地域社会とのかかわり	<ul style="list-style-type: none"> ・2022年度に策定した幼保小連携カリキュラムは、内容を修正しながら3年目を迎える。小学校へのソフトランディングに向け、また就学後の教育効果を効率的にあげていくために「メタ認知発達への系統的アプローチ」について学術的な共同研究を行う。 ・0歳児からの子育て支援「ひだまり」を、年間9回開催した。内容は「おしゃべりサロン」の他、「子どもの心理学」・「子どもの家庭看護」・「子どもの食と栄養」について学ぶ機会を盛り込み、地域の子育て支援のハブ組織となれるよう一歩を踏み出した。2025年度は9回、すべて無料とし、内容も職員全体で再検討する。 ・地域環境を生かした保育実践をさらに取り入れていく。
2	保育の計画性	<ul style="list-style-type: none"> ・領域と幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を常に意識し、保育を評価・改善できるようにするため、長期指導計画「月案」の形式を変更する。 ・すべての保育者が、幼稚園指導要領のさらなる理解に努める。とりわけ子どもの探求心の育ちにつながる領域「環境」についての理解を深めていく。
3	研修	<ul style="list-style-type: none"> ・2024年度同様に、幼児教育におけるデジタル音楽表現の可能性など、新しい教材や子どもの興味関心に即した教材について、実際に使えるようにする。専門性の向上を図る。 ・専門性の向上と保育実践をつなぐ幼児理解と指導技術の不断の研鑽に努める。

6. 学校関係者評価委員会の評価

- ・学校関係者評価委員会として、保育参観、園長及び保育者に対するインタビュー、教育課程・指導計画等の確認、保護者評価及び自己評価のデータを精査した結果、令和6年度の本園の運営並びに

教育活動が、本園の教育目標に適切かつ創造的に迫るものであったことが認められました。

- ・本年度の教育課程については、園長のリーダーシップのもと、保育者が一丸となり、園児の主体性を尊重する創造的なものとして、編成・実践されたことが高く評価できます。
- ・保育実践においては、すべての保育者が、園児一人一人の思いを尊重し、あたたかく接しています。
- ・大学教員を招へいし、デジタル音楽表現について、保育者が研鑽を図ったことは、新たな幼児教育への意欲的な挑戦として評価できます。
- ・園長自身の小学校教諭としての経験と知見を踏まえた公立小学校との連携は、園児にとって就学への期待を育むとともに、保育者にとっても園児の発達を見通した幼児教育の実践の上で貴重な学びとなったものとの考えます。
- ・保護者との連携については、園の目指す教育、園児の実態を丁寧に保護者に伝え、さらに手を携えて園児の幸せを実現されることを願います。